

日米戦争下の敵愾心昂揚についての一考察

——ガダルカナル島撤退との関連で——

序章

第一章 敵愾心昂揚の推進

第二章 ガダルカナル島撤退と鬼畜米英論の台頭

第三章 ガダルカナル島撤退をめぐる大本営発表

結語

序章

昭和一八（一九四三）年三月一〇日の陸軍記念日、この日を期して「撃ちてしまむ」の運動が全国的に展開された。日米戦争下、戦意昂揚を図るための標語としても有名になる、かかる運動の目的とその内実については必ずしも明確にされていない。⁽¹⁾

玉井清

筆者は、「鬼畜米英」の標語に象徴されるような、敵となった米英を鬼畜や悪魔と形容する人種偏見を帯びた批判が起こり、それが高揚していくのは、満州事変期ではなく、日中戦争期でもなく、日米戦緒戦の日本軍攻勢期でもなく、米軍の反攻が本格化し民間に被害が及ぶようになって以降、同戦争の後半から末期にかけてと指摘した²⁾。結論を先取りすれば、「撃ちてし止まむ」の運動は、こうした「鬼畜米英」の思潮推進の母胎となり、その目的は米英への敵愾心を人種偏見に満ちた標語に乗せ昂揚させることにあったと言える。戦後、伝奇小説家として活躍する山田風太郎は、青年期を過ごした日米戦争期に、時代の本質を衝く日記を記していたが、陸軍記念日を期し「撃ちてし止まむ」の運動が高揚する中、次のような一文を残している。

陸軍記念日が迫って、街から街へは「撃ちてしやまむ」という標語が大流行している。毎日の新聞にこの文字が出ないことはないし、往來の途中、通りすがりにきくラジオの講演でも「撃ちてしやまむ」という声が聞こえる。自分のアパートの裏の家のおばさんもこれが口癖になったとみえて、よく味噌汁の匂いとともに、「……撃ちてしやまむ……」とひとりごとをいう声が流れてくる。しかしこの「撃ちてしやまむ」という標語が果して国民にそれほど直接的な感動を呼ぶかどうかは疑問だ。「鬼畜米英をやっつけろ！」とか、「ガダルカナルの復讐をせよ！」という方が効果的ではないかと思う³⁾。

山田は、「撃ちてし止まむ」の標語が日常空間に木霊こだましていたことを活写すると同時に、かかる運動の本質を鋭く指摘していた。それは、「撃ちてし止まむ」の運動が、単なる戦意昂揚ではなく「鬼畜米英をやっつけろ！」(傍点筆者)にあったことをいみじくも指摘していた。さらに興味深いことは、「ガダルカナルの復讐をせよ！」(傍点筆者)とも記されていることである。「撃ちてし止まむ」の運動に先立ち、ガダルカナル島の戦いと同

島からの日本軍の事実上の撤退が公になるが、その前後を通じ「鬼畜米英」の潮流が巻き起こされていた。昭和一九四二年二月八日は、日米開戦一周年であったが、リベラルな立場から外交評論を展開した清沢渌の日記を読み解くと、人種偏見に満ちた米英批判が既に行われていたことがわかる。清沢は、同日「ラジオは朝の賀屋（興宣）大蔵大臣の放送に始めて、まるで感情的叫喚であった。夕方は僕は聞かなかつたが、米国は鬼畜で英国は悪魔でといった放送で、家人さえもラジオを切ったそうだ。斯く感情に訴えなければ戦争は完遂できぬ⁽⁴⁾」と、嘆じていた。ラジオからは思わずスイッチを切ってしまうような、米英を鬼畜か悪魔の如く形容する絶叫が繰り返されていたことがわかる。

本稿の目的は、右のことを踏まえ「撃ちてし止まむ」運動の前史として、日米戦争下、米英への敵愾心が扇動され「鬼畜米英」の思潮が昂揚していく経緯を、かかる潮流が生起した理由とともに検証することにある。

第一章 敵愾心昂揚の推進

前出の清沢は、日米開戦一周年を控え、「鬼畜米英」のような言論の昂揚が生起した契機を、次官会議において奥村喜和男情報局長が米英に敵愾心を持つと提議したことにあると観察していた。清沢は、大東亜戦争を通じて最も象徴的な人間として奥村に注目する。奥村の説は現在のイデオロギーを代表するがゆえに愛読し、彼の知識は日本国民を代表するが、おそらく世界には通用せずと皮肉りながら、清沢は同時代の言論界を主導する奥村の存在を注視していた。⁽⁶⁾

清沢が言及している次官会議とは、日米開戦一周年を控えた昭和十七年二月三日に開催された会議を指し、その席上、奥村は米英への敵愾心昂揚の必要を説いていた。清沢が観察できたように奥村の次官会議での発言は、

新聞紙上で報じられた。『朝日』は「敵愾心を昂揚せよ」、『毎日』は「過去の親善感一擲、米英敵愾心徹底」⁽⁸⁾、『読売』は「敵愾心を振るひ起こせ」⁽⁹⁾と、いずれも大きな見出しを付け、伝えていた。

ここで、政府による言論指導の実態を「敵愾心」に注目しながら概観すると、日米開戦直後には必ずしも強調されていなかったことがわかる。開戦と同時に出了された方針によると、開戦の理由と意義を説くことに主眼が置かれ、敵国戦略上の弱点を指摘し、敵国内部の政治経済上の弱点を執拗不断に宣伝し我が国民の自信に資し敵国民の動搖を図ることが目指されていた。「敵愾心」については、国民の生活が戦争の進展とともに逼迫するだろうが、「国民ノ痛苦ハ之ヲ敵愾心ノ刺激ニ導キ却テ戦意ヲ昂揚セシムル如ク指導ス」と、戦時下の困苦を緩和し戦意昂揚を図るため敵愾心を刺激することが有効とされるだけであった。⁽¹⁰⁾ 日米開戦一周年を控え、情報局は改めて世論指導の方針を出すことになるが、開戦直後に出了された右の方針は改定する必要はないとしながらも、戦争の前途に安易観がでて士氣弛緩の色が見えその是正をしなければならぬとし、長期戦に耐える覚悟を強調しながら次のようなことが打ち出されていた。先の方針では、敵国の弱点を強調することが求められていたが、それが若干軌道修正され敵国民の戦意や戦争努力を殊更に軽視する言論や報道は排除すべきとしながら、⁽¹¹⁾「敵国ノ専横ナル言動並ビニ非人道的所為及ビ我ニ対スル誹謗ハ成ルベク之ヲ国民ニ知ラシメ大イニ敵愾心ノ昂揚ヲ計ル」と、「敵愾心」の昂揚に努めることが決定されていた。⁽¹²⁾ 次官会議における奥村の発言は、これを受けてのものであった。なお、この決定の末尾には「取扱上ノ注意」として、「本方針ハ積極的ニ輿論ノ指導ニ利用スベキモノナルモ中央当局ニ於テ処理スルモノヲ除キ政府ノ発表或ハ指示事項トシテ公表スルコトハ之ヲ避クルヲ要ス」と注記されていた。⁽¹³⁾ この注記に示されるように、本来なら言論界への内面指導とも言える政府の方針が公にされることはなかったが、既述の次官会議の決定が公になり、しかも奥村の提議であることまでが内外に示されながら、その徹底を図ることが打ち出されたのは異例であった。

『朝日』は、奥村が席上、対支二十一カ条要求を侵略主義的とするのは英米的解釈の誤りであり、むしろ同条約は大東亜戦争の前提としての亜細亜復興の基礎と位置づけるべき、と説いたことを紹介していた。『毎日』『読売』も、近代日本の英米協調路線により育まれた米英との親善、さらには憧憬感情が未だ根強く残っていることが問題視され、その一掃を徹底するためにも敵愾心昂揚の必要が説かれたことを伝えていた。

清沢が指摘するように米英への敵愾心昂揚は、次官会議で奥村が提議した方針に沿うように図られていく。情報局が、日米開戦一周年を前に米英両国の状勢として、関連情報新聞各社に提供したのはその一環と捉えることができ、各紙は一斉に次のような見出しを付け、伝えた。『朝日』は「振起せよ・一億の敵愾心 米紙に『わが降伏条件』 武装解除・六大都市駐兵¹⁴」、『毎日』は「鬼畜！米英の残虐性 潜艦わが漁船撃沈、船員を射殺 燃えよ一億の敵愾心¹⁵」、『読売』は「魔性を發揮した米英 日本撃滅再起不能状態へ 笑止千万元夢想 我等深く銘記せよ¹⁶」と「鬼畜」「魔性」などの言葉を用いて敵愾心を煽り立てていた。記事の中では一様に、イーデン英外相が、下院で日本のアジア支配は絶対に排撃すると発言し、寄稿の中でもドイツを屈服させた後に日本を撃滅し東京入城する旨を書いていたこと、米国の有力紙が組織した協議会が、日本を屈服させた後日本に突きつける七項目を策定したことが紹介されていた。そこには、軍備を全廃させ武装解除させること、全ての占領地の連合国への引き渡し、日本本土、少なくとも六大都市への占領駐兵、指導者層の処刑等を骨子としていた。その内容が、前出の見出しに反映されていたように、米英の最終目標が日本を再起不能なまでに撃滅することに置いた残虐なものであるとする。『毎日』は、見出しにも表れているように、記事の末尾において、米国における黒人への私刑や在留邦人への抑圧、同年四月の国民学校児童への機銃掃射¹⁷、さらには、日本の大型漁船が米潜水艦に沈められた時の様子を次のように伝えていた。日本の船員が沈みゆく船体からボートに乗り移り、波間に浮かび疲労と闘っている時、米乗組員は艦橋に列をなし小銃と機銃を構え葉巻を口に噛みながら、鴨や兎を撃つように

一人一人射殺した。大東亜戦争に敗れたら、一億国民全てこのような虐待を受けること必定、ヤンキーの残虐性に思い致し心中の米英を徹底的に排除しなければならぬ、と結んでいた。⁽¹⁸⁾

先の次官会議の翌日、大本営陸軍報道部長秋山邦雄中佐もラジオ放送を通じて訴え、新聞は、この放送を秋山の写真付きで次のように伝えた。すなわち、ルーズベルトが日本を地図の上から抹殺し日本人の血の最後の一滴を絞り取るまでこの戦争は止めぬと述べたように、米国の目的は日本抹殺にあり、この戦争は仲裁者のいない戦争、勝敗のみが唯一の戦争終局のブレーキと訴えていた。⁽¹⁹⁾

このように日米戦争を特徴づけた秋山は、国民により一層の非情とも言える覚悟を求めることになる。前日の次官会議の方針を文字通り体現した秋山の放送内容を『毎日』は「心中の敵を討て 徹底的米英膺懲へ」、⁽²⁰⁾『読売』は「心の中の米國を追へ 敵愾心なきところに勝利なし」との見出しを付けて報じていた。『読売』は、敵米は戦前既にわが国民の心の中にスパイを放っている、この心の中の自由主義を打破せねばならないとのリード文を付し、その内容を詳細に報じた。⁽²²⁾ 秋山は、日本国民の心の中に広く深く喰い入っているアメリカの影響を問題視しながら「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し、われわれは先づ心の中の賊、心の中のハリウッド、ニューヨーク、心の中のアメリカを打ち破ら」ねばならないと、政治や社会の側面に止まらず文化の内面、国民の心的側面にまで踏み込み、その排除を求めている。

このように日本人の心の中に根強く残る悪しき典型例として秋山が持ち出したのが、上流階級の婦人が港の波止場で働かされている米国の俘虜の姿に同情し漏らした「お可哀相に」の発言であった。秋山は、この発言を次のように糾弾する。「お可哀相に」という上品な婦人用語は、真の日本婦人特有の優しさ、淑やかさ、あるいは敵を愛する精神から発せられたものとして賞賛すべきであろうか、政府は奨励金の割増を付けて巷に広めるべきであろうかと皮肉った上で、恐らくこの婦人は夫を戦線に送っている日本の妻ではなからう、いわんや愛し子を

野蛮なアメリカ人どもの自動小銃的にされ殺された母親でもあるまいと決めつける。これら有閑階級に属する上流社会の人々は、第一線の将兵に慰問品を送ることすら忘れていくものが多い、収入の割合に貯蓄をしない人々である、個人の利益だけを図り国を守るべき兵器の増産を第二義とする人々である。彼等は戦争を忘れていく、忘れずともなるべく戦争から離れよう遠ざかるうとしていく、と断じていた。⁽²³⁾ 前者二紙に比し、秋山の放送の内容について必ずしも多くは伝えなかった『朝日』であるが、「打破せよ心中の米國、米俘虜に『お可哀相』とは何事ぞ」との見出しにより、前記の発言への糾弾に共鳴していた。その後もこの逸話は、敵愾心の弱さが問題視される際、反面教師として繰り返し使われることになる。⁽²⁵⁾

例えば、言論報国会理事に就任した⁽²⁴⁾こともあり同時期のメディアに露出することになる野村重臣は「低調な敵愾心」と題する論説の中で言及していた。⁽²⁶⁾ 野村は、米英に対する敵愾心が微弱に過ぎるといふ説があるとし、日露戦争に際して日本人は敵ロシアの将兵を親の仇以上に考えていたのに比し、大東亜戦争下、敵の俘虜を指して「お可哀相に」との言葉を漏らした上流婦人の如きは全くの沙汰の限りである、と憤慨してみせる。その上で、野村は敵愾心が湧きあがらない理由を日露戦争以降の外交関係に求める。日本の指導者は、日露戦争後の英米の老獪な策謀に気づかないどころか、むしろ英米の影響を受け思想的奴隷と化すに至ったとする。前出の奥村と同様、対支二十一カ条要求は、本来は維新以来の日本伝統の東洋保全政策であったのに、英米の干渉により不徹底に終わったと嘆じる。シベリア出兵、済南出兵もこれと同様で、ワシントン会議は日本を抑圧する目的があったにもかかわらず、日本の指導者は英米の野望を看破できなかっただけでなく、むしろ平和事業と見なし米英追隨外交に墮した。満州事変と支那事変は、かかる追隨外交の転換を意味し、大東亜戦争はその「総結論」であるにもかかわらず、従前の外交関係を通じた英米思想の影響が時局認識や戦争目的を不明瞭化し、米英への敵愾心を低調ならしめていると総括していた。⁽²⁷⁾

このようにラジオ放送を通じて、さらには新聞紙上でも紹介された秋山の「お可哀相に」批判は、銃後の活動に非協力的というステレオタイプ化された上流階級像を印象づけながら国民一般の反感を掻き立てた。清沢は、この逸話を引いた地方紙の論説を代表的戦時論策として日記に付していた。該論策も、「お可哀相に」の言説を取り上げていた。すなわち、世の人々は、所謂貴婦人者流のセンチメンタリズム、特にその背後に潜む米英崇拜の態度を非難し、限りなき響響の情を覚えた。口に正義人道を唱え、手は悉く鬼畜の所為をして恥じることなき彼等を文明人と称する所謂貴婦人や所謂インテリの心理を、われわれは全く理解し得ないのである、と論難していた。この記事を受け清沢は、インテリに対する反感は学問を排し、知らぬものが知っているものを排撃することになる、と揶揄していた。「お可哀相に」の逸話は、未だ日本人の中の、とりわけ上流階級やインテリ階級の「心」の中に根強く潜む米英的思考の悪弊と捉えられ、攻撃対象になっていたことを示していた。「インテリ」ひいては「学問」、さらには「知」を排する潮流を清沢は嗅ぎ取り警戒していた。

このように「お可哀相に」の逸話は、米英への敵愾心昂揚に反する出来事として、反面教師の典型となる。その反響は大きく、反米英の言説の中で国民に非情の覚悟や選択を迫る際に繰り返し用いられることになる。日常生活の中で発せられた言動を問題視し、国民の心の中にまで踏み込み、米英への敵愾心昂揚の徹底を求める秋山の主張は、次官会議で奥村が示した方針を忠実に体现していた。たとえ死を覚悟した戦いの相手であっても、敵への敬意や同情を失わないことこそ人間の尊厳が担保される瞬間であるが、政府によりそれを許容しない方針が打ち出されたと言つてよい。それらを些かでも示すことが戒められるどころか糾弾の対象となる言論空間は、品位の毀損が加速され、より一層粗野に傾いていく危険を孕んでいた。

清沢は、既述のように同時期の敵愾心昂揚の原因を情報局次長奥村の指導に求めていたが、「鬼畜米英」に類する思想潮流が助長されたのは、奥村個人の影響力もさることながら、むしろ戦況との連関が指摘されねばなら

ないであろう。次章において、その点を検証してみたい。

第二章 ガダルカナル島撤退と鬼畜米英論の台頭

日米開戦後、日本軍は緒戦の勢いに乗じ戦線を拡大し、南太平洋においてはソロモン諸島にまで進出、昭和七年五月には、同諸島のツラギに上陸占領、翌六月にはガダルカナル島にも上陸し滑走路建設を成功させる。このような進撃の一方で、同年六月のミッドウエーの海戦以降、米軍の本格的反攻が始まりソロモン諸島では日米の激戦が繰り広げられることになる。ガダルカナル島において日本軍が建設した飛行場は米軍に即座に占領されたため、日本軍は、かかる飛行場の奪還を繰り返し試みるも失敗に終わり制空権は米軍が握り続けることになる。この間、ソロモン諸島海域における戦闘でも日本軍は劣勢になり同諸島周辺の制海権も失われたため、ガダルカナル島への兵員、武器、食糧の補給も困難になり日本軍は孤立状態に置かれることになる。形成挽回は不可能と判断した大本営会議は、同年一月三十一日、日本軍の同島からの撤退を正式決定する。翌一八年一月から、米軍の猛爆を受ける困難な状況下、日本軍は撤退を開始し二月七日に完了する。⁽²⁹⁾

右記の撤退が敢行されている一月末から二月初頭にかけて、新聞各紙は南洋戦線に派遣された現地従軍特派員の報告を掲載したが、そこでは現地で見聞した米軍の残虐性を象徴する出来事を「鬼畜」と一様に形容しながら伝えることになる。『朝日』の星特派員（海軍報道班員）によるソロモンでの死闘を伝えた記事はその典型であり、以下紹介してみたい。

「アメリカを叩き潰せ」との標題が付された記事は①②③回の連載であるが、①には「生膾を抉りとるのだ」来るなら来い、ソロモンの敵兵」、②には「敵を壘殺しにしてくれ 聞け！ 殲れし兵が最後の言葉」、③に

は「勝たねば死滅だ、憤怒^ををぶつつける」と、各々に刺激的な見出しが躍っていた。敵の残虐性を訴えることを意図した記事ではあるが、「生膽を抉り」「敵を鏖殺し」など日常生活では用いない言葉を使う書き手の方に、人間の尊厳を欠いた残虐性を彷彿とさせる。「叩き潰せ」「ぶつつける」と極めて扇動的な文言を用い、本文の中では米英を「奴等」と粗野な三人称を一貫して用い表現していることも異例で、読者の目を引いていた。敵が日本民族の抹殺を目指し残虐の限りを尽くす以上、こちらが品格を保つ必要はないとされたことは既に指摘したが、こうした標題や見出し、言葉遣いにもかかる方針が如実に反映されていた。しかも、それらが主要紙の『朝日』の記事に躍っていたことは特記しておきたい。以下、連載の概要を紹介してみたい。

初回の①には、次のような連載全体の前説が付されている。ソロモン諸島における敵の反攻が開始されて以来、言語に絶する死闘が戦われている。従軍している記者本人は、敵アメリカに対する沸々とたぎるばかりの憤怒と燃え上がる火のような敵愾心を肝に銘じてきたとする。既述の敵愾心昂揚の方針に符合する一文とも言える。そもそも記者本人が書いたか定かではないが、感情が先走り取材対象を客観的に観察する資質に欠ける記事であることが冒頭に露呈されていた。相次ぐ敗戦に追い詰められた敵は、永年かぶり続けてきた自由と平等という美しい文化の仮面も、ソロモンにおいては遠慮無く脱ぎ捨てた、文字通り狂気のように「獸的本性」を余すことなく露出している、とする。追い詰められ敗走していたのは米軍ではなく日本軍であったので、倒錯した事実に基づく解説である。その一方で、アメリカ人の二面性、自由や平等を理想とする文化的資質は仮面に過ぎず、その本性は「獸的」にあることが強調されていた。

②の本文は、現地で俘虜になった米兵への記者の聞き取り調査を糸口に書かれている。大量の艦艇や飛行機を喪失しても出撃してくる米兵の旺盛な戦意は、何から生まれてくるのかが記者の問題意識である。俘虜との会話の中で、アメリカ人が日本への勝利を確信していることを知るが、それは豊富な資源と工業力に対する自信に由

来すると同時に、徹底的に思い上がったアングロサクソンの民族的優越感に基づき、日本人を猿同然の劣等民族と見なす侮蔑観こそ「奴等」に執拗な出撃を繰り返させる戦意の源と分析する。敵の戦意が米国人の日本人に対する人種偏見から生まれているとの観察である。この戦意に対抗するため「奴等」の「生膽を抉りとつてやるのだ」との軍参謀の言葉を紹介する。日本人を「猿同然」に考えている敵に対しては、「大国の襟度きんど」もましてや「武士道の情」などかけてやる必要は毫もない、と結論づける。既述の「お可哀相に」逸話から導き出される論法同様、人種偏見に満ちた鬼畜の如き敵を相手にするのであるから、人間が持つべき尊厳や品格を保持する必要はなく、むしろ捨てる(31)ことが推奨されていた。

第二回目の④では、過酷な戦地で戦う日本兵の悲痛な叫びを通じて読者の敵愾心を掻き立てていた。制空権において有利な立場にある敵機の機銃掃射や爆撃に晒される日本軍に従軍した体験談である。道や河に沿って両側のジャングルに機銃掃射、日本軍がいると思われるジャングルをなめるように斉射、その攻撃の様は、番犬のいない羊の群れを襲う狼、あるいは殺戮を樂しむ漁師のようであり、豪州で原住民をスポーツ猟銃の目標にしたようなアングロサクソンの残忍な獣性の發揮であり、「奴等」は鼻唄まじりに襲いかかって来た、とする。こうした空からの攻撃に晒された日本兵は、ジャングルの耐えがたい湿気とマラリアにより体力を消耗させ、加えて十分に米の食えない栄養不足のため銃爆撃除けの穴を自分で掘って身をひそめ、その中で死んでいく。彼等が、最後まで叫び続けたのは「一日も早く敵を鏖殺しにして呉れ」という言葉であることをきいた、とする。

連載の三回目の⑤では、この連載が戦地から帰国し一ヶ月余を経て書かれたことを確認した上で、記者は戦地の死闘に鑑みる時、国内の敵愾心昂揚が足りていないことへの不満を、海軍の現地幕僚による次のような話を通じて訴える。日清日露の両戦争時、国民は、「チャンコロ」、あるいは「露助」という合言葉を以て当時の敵に対する憎悪を端的に表現した。ところが、大東亜戦争が始まって一年になろうとしているのに、アメリカに対する

憎しみの呼称がないのはどういうわけだ、と。国民の一部に「奴等」を日本人より少し上等な文化人と考えている者がいるのではないかとの識者の指摘を引きながら、劣等感から生まれる米英人崇拜の念が払拭できていないことを問題視していた。勝たねば日本民族が地球上から抹殺されることを考えれば、必要なものは「チャンコロ」あるいは「露助」にあたる言葉が自ら生まれてくるほどに、たぎるばかりの敵に対する憎悪の昂揚なのだ、憎しみに徹すれば如何なる困難にも堪え抜く力が生まれてくる、とする。

以上紹介した泉特派員の戦地報告の連載に対しては、読者の反響が大きかったことを『朝日』コラム欄の「青鉛筆」が紹介する。⁽³³⁾同コラムは、①の中で言及されていた米英に対する憎しみを示す呼称について、アメリカに対しては貪婪を表象する「弗助」(ドルスケ)、ヤンキーをもじった「洋鬼」、凶体が大きく嵩に着るのを憎む「米助ノッポ」「アメノッポ」等々、また米英をまとめアングロサクソンを掌の中で握り潰してしまえというので、「アンコロ」、世界に害毒を流布する子子^{ぼうちち}に譬えて「エーフラ」「ペーフラ」等の案が寄せられたことを伝えている。この読者の反響がどこまで事実に基づくか定かではないが、敵愾心昂揚をめぐる読者の共感が得られていることを印象づけようとしていた。

以上が「アメリカを叩き潰せ」の連載と反響であるが、このようにソロモン諸島での死闘を報ずる中で、敵米英の残虐性を強調し敵愾心を煽る報道姿勢は、『朝日』に限定された特徴ではなかった。⁽³⁴⁾『毎日』は、連載は組まなかったものの「我傷兵を戦車で轢殺^{れきつ} 鬼畜ヤンキーの本性⁽³⁵⁾」との刺激的な見出しをつけ「残酷といふ勿れ! 野蠻といふ勿れ! 敵は人間ではない。動物である。武器を手にした猛獣である。ヤンキーこそは多年文化の仮面をかぶつた獣類であった」と扇動的な言葉をたたみ掛ける書き出しで、友軍の負傷兵が列を作って歩いていると、これを見た敵兵は戦車で後ろからバリバリと轢き殺^ひしてしまった、との戦地の様子を描写する。負傷兵を戦車で轢き殺したという話も、米軍の残虐性を示す事例として種々の場で繰り返し言及されるエピソードとなる。

そこでは現地で見聞したという米軍の残虐性を象徴する出来事を「鬼畜」と一様に形容し報告していたが、同時に日本軍の苦闘も描かれていた。記事を冷静に読み解けば、米軍の猛攻を受け苦境に立たされている日本軍の姿が示されていた。⁽³⁷⁾したがって、こうした新聞報道を通じ国民は、ガナルカナル島において日米両軍が戦闘を繰り上げていただけでなく日本軍が劣勢にあり追い込まれていることを、ある程度感得させられていた。清沢は、『毎日』に掲載された特派員小瀧雄二郎の記事の一部を日記に付しながら、「新聞は南太平洋の非常な難戦を報ず。従来、戦況は一切秘密にしていたのを、ガダル・カナル、ニューギニヤ等、の苦戦を国民に知らせるのだ」と、従前秘密にされていたソロモン諸島の陸上戦での日本軍の苦戦が国民に公にされつつあることを指摘していた。喜劇役者の古川ロッパも、同時期の日記に、日本国内に敗戦論さえ流布し始めていること、空襲必至と考えられるようになっていると一抹の不安をのぞかせながら、自らを戒め覚悟を決める必要がある旨を、次のように記していた。「日本苦戦説が巷間に流布して来た、甚だしきは敗戦論が、空襲来必至も覚悟の上だ」⁽⁴⁰⁾、「人々は、空襲必至といふ心持で、静かに覚悟し乍ら眠っているらしい、明るい娯楽で救へ！」⁽⁴¹⁾と自らを鼓舞していた。

以上の記述からは、国内に、敗戦論さえ生み出す厭戦気運が醸成され空襲必至と考える風潮が生まれていたことがわかる。実際、同時期の新聞は、米国の下院において、対日連続猛爆で東京を焼け野原にする、これにより多くの国民が爆死を遂げ飢餓に追い込まれてもわれわれの意に介するところでない、と発言した議員がいることを「米の野獣性暴露」との見出を付け、紹介していた。⁽⁴²⁾さらに、米国海軍長官ノックスが、ガダルカナル島視察後、東京空襲は大いに有用だがいついかなる方法で断行するかは言明の限りでない、しかし日本人は空襲を受けの覚悟だけはした方がよいと談じたことも伝えられた。⁽⁴³⁾政府の啓蒙雑誌『写真週報』が、「敵機は虎視眈々とわが本土を窺つてゐる」と題し、見開き二頁を使い、日本列島が米軍機の爆撃範囲に入っていることを図示した記事を掲載したのも同時期であった。⁽⁴⁴⁾これらの報道を見れば、古川が空襲必至と考えるようになったのも理解でき

るであらう。

以上、ガダルカナル島での劣勢から撤退に至る戦況を隠しきれなくなった政府は、その事実を公にすることを余儀なくされていくが、それに伴い生じる国民の動揺を抑え、敗戦あるいは厭戦気運を封じ込める必要があった。ガダルカナルの戦いを通じた日本軍の苦戦が敵の残虐性の強調とともに語られていることは注目しておきたい。ガダルカナル島の戦いをめぐり米軍の残虐性が殊更強調されたのは、従前伏せられていた同島での地上戦をめぐる劣勢、さらには撤退の決断と実行、その発表に先立つ「地ならし」と位置づけることが可能であらう。⁽⁴⁵⁾ 次章では、ガダルカナルの戦いがどのように国民に伝えられたか、その事実を検証することにより、政府のかかる方策を浮き彫りにしてみたい。

第三章 ガダルカナル島撤退をめぐる大本営発表

既述のように、日本軍の同島上陸は昭和一七年六月から開始されたが、すぐに米軍の反攻を受け日本軍は劣勢になる。同年の夏以降、南太平洋のソロモン諸島とニューギニア方面で日米両軍の激戦が展開され、累次の海戦については発表されてきたが、陸軍の関係は作戦進展中のためとして秘密に付されていた。⁽⁴⁶⁾ 米軍のガダルカナル島上陸の事実と、陸軍部隊がこれと交戦中であることが初めて公表されたのは、一七年一月一日四日になってからであった。同日、大本営は帝国海軍航空部隊がソロモン海域で戦果を挙げたことを発表し、『朝日』はこれを「敵艦船十五隻を屠る。ガダルカナル島海軍部隊昼夜の猛攻」との見出しを付け一面トップの右肩を使い報じた⁽⁴⁷⁾が、これは海戦が主であった。ガダルカナル島の陸上戦については、誇張するための戦果もなかったため大本営発表とはせず、谷萩那華雄大本営陸軍班報道部長が地方長官会議の席上で語ることを通じて公にされた。『朝

日』は、これを右の大本營発表の左に並立させ掲載し「陸軍部隊、上陸を敢行 僻遠の群島に米軍と激戦」との見出しを付けて伝えることになる。⁽⁴⁸⁾この席上谷萩部長は、ソロモン方面の陸軍部隊の戦闘状況を初めて明らかにし、我が陸軍部隊が南太平洋僻遠の地において大部隊と激戦を反復し不利な諸条件を克服し敵軍を圧迫しつつあること、我が陸海軍部隊は緊密なる協同の下に数次にわたり極めて困難なる上陸作戦を敢行、目下同方面において日米両軍部隊の未曾有の激戦が展開中と説明していた。⁽⁴⁹⁾『朝日』は、ガダルカナル島をめぐる陸海両軍の発表を並べて、一面トップ、上段の横を貫き「陸海軍協力・ソロモンの敵圧迫」との見出しを付け、黒地白抜きで大書していた。ソロモン海域とガダルカナル島上で日米両軍が激戦を繰り広げていることが国民に初めて伝えられたもので、一面トップを大きく飾る見出しが象徴するように、連戦連勝というわけではなくなったものの、日本軍が米軍の反攻に抗し敵を圧迫しつつある、と日本軍優位の戦況を読者に伝えていた。⁽⁵⁰⁾

しかし、ガダルカナル島における日本軍の苦戦は必至で、一二月上旬になると、極秘非公式とは言え、同島の日本軍は海兵が全滅、陸の三戦隊の二つは沈められ、一つのみ上陸するが苦戦を強いられ上陸地点を死守するのみとの情報が、一般社会の水面下で流れるに至っていた。⁽⁵¹⁾奥村が次官会議で敵愾心昂揚の必要を説いていた時期である。前章において紹介したように、昭和一八年一月の下旬より、新聞はガダルカナル島での死闘を報じていたが、二月一日の帝国議会の衆議院予算委員会では、政府より「南方占領地に於ける陸軍軍政の状況に付き、秘密会に於て説明したいとの申出」があるとして、ガダルカナル島を中心とする陸上戦の現況が秘密会の形式をとり説明されていた。⁽⁵²⁾新聞や議会などを通じて、ソロモン諸島の地上戦、ガダルカナル島からの撤退という戦況を公にするための「地ならし」をしていたと言えよう。快進撃を続けていたはずの日本軍の攻勢が止まるだけでなく、既に紹介したように巷間においても戦局が変転し劣勢に陥り始めていることが感得されるようになっていた。

既述のように日本軍は、昭和一八年二月七日、ガダルカナル島からの撤退を完了し、二日後の九日一九時、大

本営陸軍部は日本軍がガダルカナル島から事実上撤退したことを公けにする。南太平洋方面の戦況について、日本軍は目的を達成したのでニューギニアのブナとソロモン群島のガダルカナル島から「転進」した、と「撤退」を「転進」と表現することにより、後世、大本営が戦況の真実を隠した、あるいは糊塗したエピソードとして繰り返し言及されることになる発表である。⁵³

以下、その全文を紹介してみたい。⁵⁴

一、南太平洋方面帝国陸海軍部隊は、昨年夏以来、有力なる一部をして遠く挺進せしめ、敵の強靱なる反攻を牽制破砕しつゝ、その掩護下に、ニューギニア島及びソロモン群島の各要線に戦略的根拠を設定中のところ、既に概ねこれを完了し、こゝに新作戦遂行の基礎を確立せり。

二、右掩護部隊としてニューギニア島のブナ附近に挺進せる部隊は、寡兵克く敵の執拗なる反撃を撃攘しつゝ、ありしが、その任務を終了せしにより、一月下旬陣地を撤し他に転進せしめられたり。同じく掩護部隊としてソロモン群島のガダルカナル島に作戦中の部隊は、昨年八月以降引き続き上陸せる優勢なる敵軍を同島の一角に圧迫し、激戦敢闘克く敵戦力を撃攘しつゝ、ありしが、その目的を達成せるにより、二月上旬同島を撤し他に転進せしめられたり。我れは終始敵に強圧を加へこれを懼伏せしめたる結果、両方とも掩護部隊の転進は極めて整齊確実に行はれたり。

三、現在までに判明せる戦果及び我が軍の損害は、既に発表せるものを除き左の如し。

(一) 敵に与へたる損害

人員 二五、〇〇〇名以上

飛行機 撃墜破 二三〇機以上

火炮 破壊 三〇門以上

戦車 破壊炎上 二五台以上

(二) 我が方の損害

人員 戦死及び戦病死 一六、七三四名
飛行機 自爆及び未帰還 一三九機

遠い南太平洋に進撃していた日本軍は、敵米軍の猛攻の中、反撃を行い戦略的拠点の設定という「目的」を達成したので、ニューギニア島のブナとソロモン諸島のガダルカナル島から「転進」した。日本軍は少なからぬ損害を被ったが、敵米軍の損害は、それ以上であったことが数字で示されていた。「撤退」の事実を「転進」という言葉で糊塗し、日本軍の方が多大な損害を被ったことが隠され、⁽⁵⁵⁾ そもそも後述するように戦闘の「目的」自体の変更も行われていた。その内容は、歪曲と不明朗さが露呈されていたが、日米開戦以来、快進撃を続けていたはずの日本軍が劣勢に立たされていることを、政府が初めて公式に認める瞬間でもあった。発表翌日の一〇日、⁽⁵⁶⁾ 帝国議会において、陸海軍を代表する政府委員として陸軍軍務局長の佐藤賢了は、衆議院の予算委員会、⁽⁵⁷⁾ 続いて貴族院の予算委員会において、地図まで持ち込み陸戦の戦況を中心に説明を行った。ガダルカナル島からの撤退、撤退完了後の大本営発表、議会に向向いての説明と、時をおかずに行われた一連の対応に鑑みる時、政府部内ではかかる事実の公表に向け、事前に時間をかけ準備していたことがわかる。従前伏せてきた日本軍の劣勢という不都合な事実を、一部とはいえども認め公表しながら、国民の動揺を抑え戦争継続の正当性を理解させるための作為を余儀なくされていた。⁽⁵⁸⁾ 以下、佐藤が帝国議会の予算委員会でガダルカナル撤退をどのように説明していたか検証してみたい。

まず、昨年五月下旬以降、日本軍が占領していたガダルカナル島に米軍が上陸し、八月以降、日米両軍との間

で戦闘が開始されたとの事実を改めて説明した上で、敵撃滅の目的は達することができず同島から撤退したことを認めていた。その一方で、戦闘を次のように位置づけていた。すなわち、日本軍は、敵の準備が整う前に敵地深く挺進し、日米両軍は、ガダルカナル島とブナ方面で激突する。佐藤は、この激突を一大「遭遇戦」と形容するとともに、両地域を日本軍による総追撃の最先端と位置づけながら、「前衛」の役割を果たしたとする。

その「前衛」の役割は、要地を占領して敵を拘束し、後方の本隊に展開の自由を与えることにあり、米軍は半年間、同地域に牽制されることになる。その結果、本隊の諸部隊をして、ビルマより旧蘭印諸島、ニューギニア、北部ソロモンを経て、マーシャル及びその以北に亘り確実に戦略展開を完了し、戦略拠点と重要資源地域とを悉く包蔵する大東亜共栄圏の外壁を構築、今後の攻勢作戦の足場を固めることができたとする。戦略上要衝の地をめぐる戦いからの撤退を余儀なくされたため、本来の「目的」自体を変更する苦しい解説であった。

次にガダルカナル島、ブナ方面からの撤退理由が、前記の「遭遇戦」における「前衛」と「本隊」との関係から説明される。「本隊」は「前衛」に逐次加入するのが本則であるが、他方「前衛」を前方の要地で戦闘させ、「本隊」は後方で戦闘準備を構築、それが達成されると「前衛」を「本隊」の線まで後退させる「後退展開」と呼ばれる戦術もあり、今次はそれが採用されたとする。「後退展開」が当初からの戦術であったかのような解説である。⁽⁵⁹⁾

この「後退展開」を採用する理由は三つあり、第一は、両地域は、日本軍の追撃の末端にあるため策源地が遠く離れているのに比し、米軍は策源地たる豪州が目と鼻の先にある。したがって、日米の展開速度に大きな懸隔がある。このように終始劣勢な兵力を以て優勢な敵と対戦する戦術上の不利を補うため「後退展開」が選択された。第二は、敵に制空権があり遠距離に亘る海上輸送の困難がある中、軍需品を同島に展開するためには甚大な船舶の損害を覚悟しなければならないので、これを回避することであった。第三は、ガダルカナル島は、米豪間

の連絡の要衝にあるのでそれが敵に占領されると米国にとっては脅威となるが、日本にとっては既述の日本軍が構築した外壁から突出した部分なので、たとえ失つても大局的に見て大きな影響はないと弁じていた。既述のように同地域の戦闘を、一大「遭遇戦」と表現していたが、この言葉を使うと、同地域は日米両軍が偶然衝突した場所になり、戦略上の要衝地をめぐる戦闘との印象はなくなる。ガダルカナル島は「四国の半分にも足らぬ叢爾」とも説明されていたが、同島の戦略上の価値を矮小化し撤退の合理性を示そうとしていた。

以上、撤退の理由を説明した上で、むしろ撤退をめぐる特筆すべき意義を、次の三点から強調する。第一は、統帥上の英断である。本来、日本軍は撤退を好まず不得意としているが、足場が悪い環境を避け、より有利な条件の下での戦いに展開した英断を評価し、撤退の決断ができず失敗した歴史上の二事例が紹介される。まず、足利直義と戦った楠正成は、直義を京都まで引き込み糧道を絶ち一気に撃滅することを考えていたが、この戦術が採用されなかったため湊川で討ち死することになったとする⁽⁶¹⁾。次に、柴田勝家の部将佐久間玄蕃が賤ヶ岳に執着し過ぎたため、豊臣の大軍の攻勢を受けることになり、ひいては本隊の柴田家も崩れることになったとする。いずれも、後退の勇気を欠いたため敗北を喫した事例として紹介しながら、該地域からの撤退の決断を正当化しこれを英断と評価した。

第二に、陸海軍の渾然一体となった協同が実現したことの評価である。ガダルカナル島への先遣は海軍部隊が行っていたが、米軍の反攻を受け陸軍部隊がこれを救援した。しかし、その陸軍部隊が苦戦に陥り海上輸送による後方からの支援を受けられなくなると、今度は海軍が輸送船を護衛し、それもできなくなると軍艦自らが輸送を買って出た。本来軍艦は輸送には向かず積載量が限られていたが、空爆と魚雷の攻撃を受ける中、文字通り不眠不休、友軍補給のため幾百も往復した。敵機、敵艦が跳梁する中、未曾有の撤退がほとんど損害を受けず達成し得たのは、陸海軍一体の作戦指導があったためと解説された。同時期、陸海軍の間の醜い争いは一般にも目に

つくほどで響感を買っていたが、それを打ち消す解説でもあった。

第三に、戦地の過酷な状況、将兵が直面した労苦が具体的に紹介される。敵が制空権と制海権を握る中での補給輸送の困難さは言語を絶するものがあり、揚陸される軍需品は僅少で、主食は一日一合に満たず、時には数日間支給なし、「米」は海水に漬かり腐敗、副食物はほとんどなく梅干し一つに歓喜の声があがる。飢えをしのぐため、木の実、草の根、毒でないものを悉くとり、榕樹に銃剣を刺し、蔦を切って滴る水で喉をうるおす。マリアに冒され Dengue 熱に悩まされる中、一言も不平不満を言わず、敵愾心を米軍に結集し戦い続けた。このような困苦欠乏の中でも、終始攻撃精神を失わず勇戦奮闘した日本軍の姿は、敵国の報道機関によっても伝えられたとしながら、それが大東亜共栄圏の外壁を固めるに際して、あるいは帝国海軍の大戦果に貢献したとする。

以上のような意義を強調した上で、米軍に万斛ばんかくの恨みを残して斃たおれていったこの勇士達の讐かたきは、必ず討たねばならない。日本は、経済軍事の両面で追い詰められ自存自衛の必死から蹶起した。ルーズベルトは当初、戦争目的をデモクラシー擁護のためとしていたが、それでは国民の戦意が燃え上がらないので生存のための戦争とこじつけ、パールハーバーの奇襲を種に国民の敵愾心を扇動捏造ねつぞうしている。戦争目的の偽造、敵愾心の捏造、米国の政治のどこに正義や人道があるのでありましょうか、ただ暴戾ぼうれいの一語に尽きると断じる。米国の指導者が暴戾であるだけに、政治に正義が無いだけに、外交や理論で話せる米国ではない。我等は勝って勝ち抜いて、真に日本人の実力を彼等の目にも見せて、正常なる態度を以て我に対して来るようになるまで戦い抜かねばならない。そのためには、今後敵の反攻を片っ端から撃砕するのみならず、進んで彼等の心臓に我がメスを加えなければ、傲岸なる米人の戦意を放棄させることは困難である。戦場、工場、農場、家庭、一億国民の創意と工夫、努力と奮闘により、多少時間がかかっても米国の心臓に必ず我がメスを加えなければならない、それによってこそ、今日犠牲となった一万数千の英霊に、さらには大東亜戦争の英霊に、本当に静かに眠っていただくことができる。

信じる、と結んでいた。兵士の戦地における労苦を強調することを通じ、銃後の国内の戦時体制強化が訴えられていた。

牽強付会とも言える苦しい解説が行われていたが、前章で紹介した新聞報道同様、制空権と制海権を失い、南洋の過酷な環境の中で闘い同島からの撤退を余儀なくされた日本軍の苦境は行間に滲み出ていた。大本営発表では、「転進」という言葉が使われていたが、佐藤の議会における説明の中では「撤退」という言葉が使われ、同島における米軍撃滅の目的は達成できず撤退したことは示されていた。米国内の敵愾心、これを掻き立てるためのプロパガンダの実態には言及されていたものの、前章の新聞報道を通じて見たような米軍の残虐性を殊更強調し日本国民の敵愾心を掻き立てることは自制されていた。

この予算委員会における佐藤の説明は、同一〇日夕刊の一面を大きく割いて新聞紙上で紹介されたが、見出しには次のような言葉が大書された。『朝日』は、「南太平洋作戦の全貌 孤軍猛攻、米軍釘づけ 後方確立して前衛転進」⁽⁶²⁾、『毎日』は、「敵兵力牽制猛攻 本隊、大東亜を囲む 壮絶 南太平洋作戦」⁽⁶³⁾、『読売』は「我揺るぎなき南太平洋の作戦 戦術上の後退展開! 断じて失望落胆無用 兵家の常道・三点を考慮」⁽⁶⁴⁾との見出しが躍っていた。陸軍を代表し説明を行った佐藤の説明に沿って見出しを抜いていたが、『読売』の見出しに見える「断じて失望落胆無用」の一節は注視すべきであろう。政府がいかに糊塗しようとしても、かかる大本営の発表とその前後に行われた新聞報道や帝国議会における陸軍代表の説明は、日本軍のガダルカナル島での苦戦と同島からの撤退が示唆されていたため、前章で紹介したような日本国民の動揺を招く懸念が十分あった。⁽⁶⁵⁾

以上のように、大本営発表と間髪入れず、議会の衆議院と貴族院の予算員委員会で陸軍代表が時間をかけ説明を行っていることから、政府側が事前に周到な準備をしていたことがわかる。この事実を鑑みると、前章で検証した発表に先立ち行われたガダルカナル島に関する報道もその一環であったと位置づけることが可能であろう。

まず、同島における戦闘の内実が伝えられていることから、従前規制されていた関連報道が解禁されたことがわかる。さらに、大本営発表を控えた同時期に、現地特派員報告の形態をとりながら日本軍の苦闘と敵米軍の残虐性が各紙一様に繰り返し報じられたことは、情報局などによる世論誘導、積極的言論統制が行われていたことを裏付けていた。第二章で紹介したような扇動的記事や粗野な文言が紙面全体を覆っていたわけでも、恒常的に掲載されるようになったわけでもなかったため、一際目を引く一連の記事であった。それだけに情報局などによる水面下での言論指導を看取できる。ガダルカナル島での日本軍の苦戦を垣間見せつつ、その一方で、敵愾心昂揚の同種の報道が、しかも発表直前に行われていたことから、敵米国の残虐性に目を向けさせることにより日本軍の劣勢を糊塗し、戦況の将来に対する国民の不安や疑念を可能な限り抑える目的があったと結論づけることができるであろう。⁽⁶⁶⁾

結語

日本軍のガダルカナル島での苦闘と同島からの撤退、その事実の公表は、真珠湾攻撃からシンガポール占領、さらにはフィリピン占領に象徴される日米開戦緒戦の快進撃が止まり、戦局が全く異なる様相を呈し始めていた隠しようなもない現実が国民の前に晒される瞬間であった。「鬼畜米英」の標語とともに、敵米英の残虐性が殊更強調され敵愾心の昂揚が助長されたのは、それまで隠してきたかかる事実を一部といえども公表することへの備え、その衝撃を少しでも緩和あるいは回避し、厭戦気運の台頭を抑止するための一方策と位置付けることができよう。

日米開戦一周年を控え、敵愾心の昂揚が図られた際、清沢は、「これ以上、どうして戦意昂揚が可能か」と半ば

あきれていた。⁽⁶⁷⁾この時点で、ガダルカナル島からの撤退は決まっていなかったもので、同島撤退と同時期の敵愾心昂揚の方針を直接関連づけることはできないかもしれない。しかし、日本軍の劣勢が一般社会においても感得され始める事態を迎え、政府は国民の不安や疑念を払拭する、あるいは軽減する必要性に迫られていた。なにより、情報局提供の情報に基づき、米国の目的が日本抹殺にあると喧伝され、敵愾心昂揚の中で米軍の残虐性が強調され、米英色一掃の不徹底の典型として「お可哀相に」の逸話が取り上げられ糾弾された。これらは、その後展開される「撃ちし止まむ」運動の中でも繰り返し説かれることになる。日米開戦一周年からガダルカナル島撤退に至る間に醸成されたかかる思潮は同運動に流れ込んでいく。その内実については、稿を改めて論じる予定である。

- (1) 『撃ちてし止まむ——太平洋戦争と広告の技術者たち』（講談社選書メチエ、一九九八年）があるが、同書は戦時下の広告の技術者達のプロバガンダを扱ったもので「撃ちてし止まむ」の運動に特化した研究ではない。
- (2) 玉井清「鬼畜米英への道」（玉井編著『写真週報とその時代（下）』、慶應義塾大学出版会、二〇一七年）。
- (3) 山田風太郎『戦中派虫けら日記』（筑摩書房、二〇〇六年）昭和一八年三月四日の項。
- (4) 清沢洌『暗黒日記』昭和一七年二月九日（『暗黒日記Ⅰ』、評論社、昭和四五年）。
- (5) 同右。
- (6) 清沢は、奥村主導により形成される言論空間を「ラジオの低調はもはや聞くにたえぬ」と難じ一蹴しながら『暗黒日記』昭和一七年二月二日）、その責にある彼を一貫して批判し続けることになる。本文の中で紹介したように奥村の提言に基づき敵愾心昂揚が図られるが、警察署の情報部が米英に対する敵愾心宣伝の効果について問いつつ、奥村の提言に基き、奥村情報局長の政策を批判するだけでなく、奥村の更迭の必要まで述べていた（同上）。さらに、奥村は、「日本の対外宣伝は非常にうまくいっているといっている。この人々は対手の心理を知らず、自己満足がすなわち対手の満足だと考えている。彼等は永遠に覚るところはあるまい。悲しむべし」（『暗黒日記』昭和一八年二月

- 一〇日」と嘆じ、相手の心理を推し量ることをせず自己満足に陥っている日本の宣伝を批判していた。これら一連の記事から明らかなように、清沢は、当時の歪んだ言論空間を嘆息しつつ、その空間形成を主導する元凶としての奥村の存在を注視し批判の鋒先を向けていた。
- (7) 『朝日新聞』、昭和一七年二月四日付夕刊。以下、本稿では適宜『朝日』と略す。なお、本稿の夕刊の日付については紙面上段の印刷表記に従って記すが、実際は、前日の夕方に発刊されている。この場合は、三日の夕方である。夕刊の表記は他紙も同様の扱いをする。
- (8) 『東京日日新聞』、昭和一七年二月四日付夕刊。なお、同紙は、昭和一八年一月より『毎日新聞』に改題される。本稿の中では、出典以外混乱を避けるため、改題前でも『毎日』と適宜略して表記する。
- (9) 『読売報知』、昭和一七年二月四日付夕刊。以下、本稿では適宜『読売』と略す。
- (10) 『日英米戦争ニ対スル情報宣伝方策大綱（昭和一六年二月八日）』（『現代史資料41 マスメディア統制2』、三七七―七二頁、みすず書房、一九八五年）。
- (11) この変化については、前掲・玉井「鬼畜米英への道」の中でも指摘している。
- (12) 「大東亜戦争ノ現段階ニ即応スル輿論指導方針（情報局、昭和一七年一月二七日）」（『資料日本現代史13』、一九七―九八頁、大月書店、一九八五年）。
- (13) 同右。
- (14) 『朝日新聞』、昭和一七年二月六日付夕刊。
- (15) 『東京日日新聞』、昭和一七年二月六日付夕刊。
- (16) 『読売報知』、昭和一七年二月六日付夕刊。
- (17) 前掲・玉井「鬼畜米英への道」。
- (18) 『東京日日新聞』、昭和一七年二月六日付夕刊。
- (19) 『東京日日新聞』、昭和一七年二月五日。
- (20) 同右。
- (21) 『読売報知』、昭和一七年二月五日。

- (22) 同右。
- (23) 同右。
- (24) 『朝日新聞』昭和十七年二月五日。
- (25) 昭和十七年二月二三日、大日本言論報国会が徳富蘇峰を会長に据え発足したが、野村は四名の常務理事の一人に選ばれていた。
- (26) 『読売報知』昭和十八年一月九日。
- (27) 清沢は、明治維新は攘夷派が敗れ開国派が勝ったが、今は反対になり、明治、大正に対する激しい反感が随所に見られる(『暗黒日記』昭和十八年一月二三日)としていたが、野村の言説はその典型であった。
- (28) 清沢は、竹本孫一(情報局官房第二課長)「『西洋は野蛮ぢや』」(『中部日本新聞』「文化」昭和十八年一月九日)の記事を、自らの日記に付し(『暗黒日記』昭和十八年一月一日)コメントしていた。
- (29) 日置英剛『年表 太平洋戦争全史』(国書刊行会、二〇〇五年)。
- (30) 『朝日新聞』昭和十八年一月三〇日付夕刊。
- (31) 『朝日新聞』昭和十八年一月三一日付夕刊。同紙の縮刷版では、上記の通り夕刊に掲載されているが、朝日新聞のデータベースの『聞蔵』では版が違いため一月三二日朝刊に掲載されている。
- (32) 『朝日新聞』昭和十八年二月二日付夕刊。
- (33) 『青鉛筆』『朝日新聞』昭和十八年二月一六日。
- (34) 『読売』は「激闘の南太平洋戦線従軍記 壮絶 隊長辞世の歌 鬼畜米軍 復讐へ勇士の肉弾突撃」の記事を掲載していた(『読売報知』昭和十八年二月三日)。
- (35) 『毎日新聞』昭和十八年一月二三日。
- (36) 『毎日新聞』昭和十八年一月三〇日。
- (37) 『毎日』は、先の二三日の記事を受け、翌日の社説では「この敵を斃せ」と題する記事を掲げ、軍報道班員が書いた記事から読み解くことができる二点を指摘していた。第一は、戦場が地形的にも気象的にも攻略のうえで恐るべき困難な条件を備え、敵軍が第一級の装備を取り揃え頑強無比の抵抗を試みていること、第二は、負傷兵を戦車に轢

き殺す残虐性であった（『毎日新聞』昭和一八年一月二四日）とする。敵の残虐性を訴えながら、同時に日本軍が過酷な条件下、戦地で苦戦を余儀なくされていることが指摘されていた。

(38) 『暗黒日記』昭和一八年二月二日。この『毎日』（昭和一八年二月二日）の記事も「南太平洋死闘の従軍記」と黒地白抜き横書きの見出しを上段に付すとともに、「屍を汚す鬼畜の敵 眠れぬ勇士の霊 この仇はきつと討つぞ」の縦書きの見出しも付けられていた。この記事は、清沢が指摘するように南太平洋の戦線で日本軍が過酷な環境の中、苦難を強いられていることを伝えていたが、清沢が日記に残したのは、最後の「勇士・最期の言葉」の部分で、そこには「相手は鬼畜にも等しいメリケン兵である、敵はわが勇士の死体をも一つ一つ拳銃をもつて狙撃した上、時計、万年筆、財布等目ばしいものは一つ残らず強奪、続いて戦車をもつて死体の上を走らせた」「我等同胞達は、歯をくひしりながら、この鬼畜のメリケン共を一人残らず殺してくれと戦友に頼みつ、最期の息を引きとつてゆくのだ」と、ここでも鬼畜米英論が書き立てられていた。

(39) 『暗黒日記』昭和一八年二月二日。

(40) 『古川ロッパ昭和日記 戦中篇』（晶文社、二〇〇七年）昭和一八年一月二六日。

(41) 同右、昭和一八年一月二九日の項。

(42) 『読売報知』昭和一八年一月三〇日付夕刊。

(43) 『朝日新聞』昭和一八年二月二日付夕刊。

(44) 『写真週報』昭和一八年一月二〇日、第二五五号。前掲・玉井「鬼畜米英への道」。

(45) 前掲「アメリカを叩き潰せ^①」では、アメリカへの敵愾心昂揚を推進するのは、「断じて不利な戦局の展開を糊塗するためではない」と弁じていたが、むしろこの否定の言辞の中に本音が透けて見えていた。

(46) 「南太平洋の作戦について」『週報』昭和一八年二月一七日。第三三一号。

(47) 『朝日新聞』昭和一七年一月一五日。

(48) 同右。『東京日日新聞』（昭和一七年一月一五日）も同様の紙面構成で、一面右のトップには大本営発表を「巡駆艦十二隻を撃沈破 敵艦船大半一挙に屠る 熾烈なる戦闘なほ続行中」と、左に並んで谷萩の談話を「陸の精鋭上陸、米軍猛撃 絶海、孤島に艱苦の撃滅戦」と、各々見出しを付け、上段の横を貫き「陸海軍ガダルカナル島（ソコ

モン群島) 強襲」との見出しを黒地白抜きで大書していた。『読売報知』(昭和一七年一月一日) は、陸海軍の並びが『朝日』『毎日』と逆になっていた。すなわち、一面トップの右には、陸軍の谷萩部長の談話が「敵の奪回企図に体当たり 陸軍全東亜の大作戦」「悪条件を克服、逐次敵を圧伏」と、左に並んで大本営発表の海戦が「艦船十五隻を撃沈没 熾烈な戦闘依然続く」と、各々の見出しが付けられ紹介されていた。一面の右肩の縦には、「陸海協力 続くソロモンの戦果」と陸海両軍の戦況を概括する見出しが付けられるとともに、上段を横に貫き「陸の精鋭大挙ガダルカナル島上陸」との見出しが黒地白抜きで大書されていた。紙面の構成、一面上段の横を貫く見出しから、『朝日』『毎日』に比し、『読売』は、陸軍に重点を置いた紙面を構成していたことが窺える。

(49) 『朝日新聞』昭和一七年一月一日。

(50) 文芸評論家の伊藤整は、同日の日記に、「今朝またソロモン海戦発表。米巡六隻沈没、我艦一大破、駆二沈。陸軍はガダルカナル島に上陸して戦っている由」と記していた。この記述からは、ソロモン海戦の戦果が数次にわたり発表されていること、陸軍のガダルカナル島での戦いを初めて知ったが、事実として受け止め、その劣勢については想起されていないことがわかる(伊藤整『太平洋戦争日記(一)』(新潮社) 昭和一七年一月一日の項)。

(51) 同右・伊藤『太平洋戦争日記(一)』昭和一七年二月五日の項。

(52) 『第八十一回帝国議会 衆議院予算委員会会議録 第五回』。

(53) 陸軍情報部長を経て当時は情報局第二部長(心得)、その後は陸軍報道部長にもなる松村秀逸は、「撤退」「退却」でなく「転進」という人を惑わす言葉で発表したので評判が悪く、「転進」という言葉は、佐藤軍務局長と有末(参謀本部)第二部長の合作と聞いていたが、日本軍が退却を戒め「退却」という言葉すら忌み嫌っていた同時代の空気をよく表現している、と後年回想する(松村『大本営発表』(日本週報社、昭和二七年、一六四—一六六頁)。

(54) 前掲「南太平洋の作戦について」。

(55) 日本側の戦死行方不明者は、二二二、四九三名(二二一、一三八名との資料もあり)、アメリカ側の戦死者は、六、八四二名であった(太平洋戦争研究会『太平洋戦争・主要戦闘辞典』(PHP文庫、二〇〇五年)。

(56) 『第八十一回帝国議会 衆議院予算委員会会議録 第十四回』。

(57) 『第八十一回帝国議会貴族院予算委員会議事速記録第二号』。

- (58) 衆議院と貴族院の予算委員会の会議録、大本営発表の全文とともに佐藤の議会での説明を紹介した政府広報誌『週報』掲載の前出の「南太平の作戦について」、内容には若干の差異があるが、本稿では三者を適宜利用しその要旨をまとめた。
- (59) 佐藤は、後年「遭遇戦の後退展開」と議会で説明したのは、軍隊や国民の士気を落とすまいと考えてのことで、本来は、追撃から防戦に転じ本隊の到着を待って攻勢をとると言いたかったが、それはできなかったと回想する（佐藤賢了『大東亜戦争回顧録』、徳間書店、昭和四十一年、二四九頁）。
- (60) 日本軍の中に撤退を好まぬ空気があったとの前出の松村の指摘（前掲『大本営発表』）と同趣旨のことが語られている。
- (61) 予算委員会の説明では、貴衆両院とも二つの事例に言及していたが、『週報』のまとめにおいては、楠正成の事例は割愛された。
- (62) 『朝日新聞』昭和十八年二月一日付夕刊。
- (63) 『毎日新聞』昭和十八年二月一日付夕刊。
- (64) 『読売報知』昭和十八年二月一日付夕刊。これを受けて同紙は、斎藤忠「ガダルカナル島転進」（同上、昭和十八年二月一日付夕刊）と題する「転進」の文言を入れた論説を掲載したが、ガダルカナルはいま一個の無価値なる島嶼として残存するだけと同島の価値を矮小化しつつ、この一個の島嶼のために敵は、巡洋艦のほとんどを失い、航空母艦も全滅、残存する主力艦の過半を沈められることになったと、過大な解説を加えていた。
- (65) 宇垣一成元陸相は、軍当局は潤色した文章として発表し、国民識者の多数は悲しむべき戦報として強き感動を受けていると観察しながらも、宇垣自身はさほど悲観すべきとは考えず帝国の前途洋々たるものありと、むしろ楽観論を日記に記していた（『宇垣一成日記3』（みすず書房、一九八八年、一五三九頁、昭和十八年二月一日の項）。なお、これに先立つ前年の十二月二日の項でも、宇垣は、識者の間に悲観論が増加していると前章で指摘したと同様の雰囲気在国内に既に生じていることを観察しながらも、自らは、楽観はゆるされぬものの悲観の必要はないと記していた。さらに、一八年一月一六日の項では、ガダルカナルの戦略的価値は乏しいので放棄するのではとの噂が世間に生じているとも記し、大本営発表を前にしてそうした風評は既に世間に流れていたことがわかる。

(66) 大本営陸・海軍部は、ガダルカナル島撤退について、検閲当局を通じ府県長官宛てに、転進が退却したかの如き印象を与える事項、大本営発表に疑惑を醸成するような事項、戦争指導に異説を主張、批判するような事項については、検閲対象にするよう要請していた(「ニューギニアソロモン群島派遣部隊転進に関する大本営発表に関連する記事取縮事項」(『戦時新聞検閲資料・第12巻』、現代史料出版、一五〇―一五一頁、中園祐『新聞検閲制度運用論』、二〇〇六年、三五二頁)。

(67) 『暗黒日記』昭和一七年二月九日。